



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

天庫

勝侯氏口益書

○ 西美理駕大合衆大統領姓斐漠名美辣達

日本國

癸丑月九日於
浦賀港所至

北赤利釋書翰

大君主殿下辛安大尊大敬良友平時派本國師船大臣水師提督波理首領一幫兵船帶公書到

貴國境專呈

殿下御覽矣茲面諭該水師提督轉告朕心人欵與

貴國通和之意請

殿下來思令長我兩國藉興和及之結好並互通商之章程今欽

蓋沒理未

責國為辦此事故達

君主嚴刑吾合衆同規定例嚴禁各官懈營列國之政禮設此明諭該欽差在貴地之時務勞勤貴處人民今合衆國廣大東西邊疆各極

於海在西界。正對高日本國。若坐火輪船。雖加理科。亦亞省或由。
可理于群駛過太平海十八晝夜。能到。

貴國之口序也。合衆國之一省。名計加理科。亦亞士大邦。士產多。每年
出黃金僅。一千萬兩之多。同白銀水銀。玉等物。日本亦然。富澤多。
產寶物。其財虎多。勢故此兩邦國。互相往來。必得大益。朕亦為
此。要聞商意矣。茲知悉日本國之古例。只准中國。可商國。私能
通商。除此二國之外。不准別船。進華。祇因世間之情。萬國之政。
漸多有。段。度。古例。易。新。且。

貴國初立古例之時。並無理駕。即名新地。摺。由歐羅巴人。離本處入舊
山。家。老耕種。左後長久。人民。鴻少。且貧。近今。民主繁華。貿易
年。多。盛。布。各處。量。

肇。至。患。當。能。改。古。例。以。准。我。國。人。責。買。則。各。洋。得。大。益。矣。如。若。

君主。只准。古。例。禁。止。別。國。入。埠。是。照。依。國。法。不。妨。先。歲。數。年。或。章
十。年。間。能。無。有。制。否。或。因。責。買。無。益。然。後。仍。復。古。例。可。安。
本。國。與。別。國。立。約。亦。足。追。上。之。尾。若。因。西。國。虧。升。蓋。新。約。
旦。戎。西。國。各。武。誓。開。港。口。嗣。後。可。知。何。樣。也。又。諭。深。欽。善。謀。
殿。箭。每。年。本。國。船。雖。加。理。科。亦。亞。駛。往。中。國。者。竟。無。抑。有。獵。鯨。
魚。私。多。有。常。近。

貴。境。此。寺。各。船。或。遭。颶。風。擊。碎。在。海。邊。雖。船。身。破。人。貨。而。

全。朕。慮。此。寺。之。鄙。命。煮。固。已。

貴。國。官。民。見。此。寺。人。船。量。心。安。撫。恩。待。仁。慈。而。物。皆。保。留。俟。有。奉。
國。船。到。即。帶。歸。也。且。憐。本。國。三。民。亦。是。五。倫。之。內。豈。
君。主。不。知。矣。若。不。受。此。論。則。不。快。人。心。矣。且。聞。

貴。國。多。產。煤。炭。食。物。繁。盛。故。渝。液。欽。益。而。告。本。國。火。輪。船。渡。洋。

海方中國者、計燒煤炭數石、其船不能多載、在途不敷足
用、並從經濟而回本國又不便、所以各船要入

貴國港口、買煤炭、食物接濟、并取水之便、加買物或將銀錢或以簽賃

免之可也。

君主議指南境一港口、能使使本國各船暫泊、而得買此須物、兼裝水、
此事務希速即允准、免朕遠望而怨也。今諭該欽差沒理坐領一幫兵船、
貴國來江戶名京、代為拜見、朕敬思我西國沿邊、意南貿易、
俾本國船舡、我須食煤炭等物、並保濟、苦楚人民、除此等事務之外、該欽差另具、急再船由裝有數件本國巧藝、
右島造焉。

君主收納、弗覽、卑物知承恩友真敬之元領。

金能真神保

君主受萬福感聖顧哉。

知此公書、是實者、全國大工重及書名、尽押為證。

正美理駕大合衆國京、在華盛頓、西國、紀年二千八百五十年

十月三日、即辛亥年、育初六日刻。

大學士佐斐列奉勅書

國璽

御印

漢文和辭重美莊子大含哀國大統收沒志節生歎變漢名七美殊上一毛無

通

至美莊爲大食版以五色紙雙面複合之
不異國大食主敵下至中國者多也
今言此事之子也以紙之形而爲之
以紙之形而爲之紙之形而爲之
物主之五色紙也以此紙一
微也紙之形而爲之紙一
造也紙之形而爲之紙一

某大前年也於、新羅國。丁酉之年。予子公考因
通也。故至宣城。尋其下。碑下。碑下。碑下。碑下。
考我東土。祀五方之神。文。北。故。南。東。西。通焉。之。之。
降。於。是。大。有。而。此。方。欲。天。修。之。之。考。之。也。有。云。陰。
微。而。有。為。累。之。而。通。之。也。考。之。良。國。觀。室。之。像。
多。之。活。少。之。多。之。能。也。多。之。而。統。之。而。觀。之。也。考。之。方。
皆。之。改。考。之。考。之。考。之。考。之。考。之。考。之。考。之。考。之。考。之。考。之。

改修渡船船器至臺灣前船の事と交換連泊久留
半日も止むの後とも回し船のすゝれは空曠處にて
舟中も車馬を引く者なしや是故海面非をまれる
快坐なまら其通りに走る者多ては急く石炭とせし
食あも以てうなぎあれは取えぬ者放るより空云上り
毛利ハ大兵士騎船を半漁と爲度てはまにモ石炭と竟
半日移石舟の保て取半日多く積載とうて速
中身を所用ヨリ出キテコトと以て五日と併在延長
角弓弓矢弾丸數十石、又以渡船に於ハ北國の港に入
殊一色不度官船と宣示て而車を改ミテ久と渡船を改め
の意を承承とてこも詔わを蒙ルハ奈良浅見て傍見
御、法尔と之を立候之を立亦承承、是を承承立て有候

の港にて少々金草の詔取、號呼め私釣ノ内浦泊
因空を賣キ六合神島と云候、此は勿シ御ハニ通之未
迷フ岸と江と櫓木遠望を免て安心といたす空を竟
此ノ港と云候是は一泊の意耳と。達志國之五城にて
「名高へれま聖事へりて内浦一城ホチテノ内浦事
明義九帳と設ケ貿易地と定ミ、又船主て公科石
炭水と賣、又六郎頭の人役と保護憲警一旅、トキム
トス諸子と陸にて外山城主のものと當うる志を乞
又都小山國底の竹籠あり乍早御件と積御色
看下近景、内浦既にたらぬ、禁物を收加不被ホラ及至
黑寢奉致の臣と申あら玉扇、あら、全體具備の
美津、君と往復一ても福と文も空腹と來る

かとす此書は元のふをかみのえひが先も名をも
押さんからむだらとせられよ

主事江島大合衆西洋都ハ華盛頓トモ化ニテ西洋の
記年一千九百零九年正月二十二日

吉士復烈和と奉りて

書

癸卯九月
浦賀港所呈
北永利幹言留

因添論

亞美理駕大合衆國大統領。逆變漠。名美速。連。

日本國

大君主殿。辛安。朕心全賴本国師船水師提督役。是
見歲端正才能之臣。故特派勅賜之欽差全權代

大合衆國來。

貴境而同

大君主所派全權之一臣等齊議定意鈐。印西國和睦
通商。駁船。進港。且有條約章程及各緊要事務均
屬該全權等。故此辦理。嗣後該欽差。役理刻奉候。

奉。朕。興公會大臣議定。允肯批准。

亞美理駕大合衆京在華盛頓。西國。記年一千八百六十

二年十月十三日。本國立改三十七年。即享年十

月初六書合衆印鈐印為證

太子士依變烈奉勅書

國
印

汲理
等書
月二日

○正義駕大合衆國欽差大臣原管水國師船天竺中國日本
等海水師提督大臣役理為申陳事功本欽差現奉
本國太統領欽差全權便宜行事坐領一邦師船來日本國
境呈永

大皇帝殿下降諭西國和睦之條約奉上。吾君主公書並
本欽差勅書此二書現已効寫英字門面字漢字

等書錄呈

御覽惟此二書之正稿理合國封候召見三日面呈
大皇帝備閱並特奉白諭轉告
吾君主覺思於

陛下慰和之意

吾君主聞合衆之民自心至致

貴地被^{レラ}狂風漂至海邊族民等被賈處官民見之如仇敵故

吾君主心甚憂慮今指數年前有^下三船名叶鳴利進嘶亦林建^上等人民漂到海邊皆受許多委曲等卑

欽差奉諭面諫

珠

殿^レ下立請

俞允定勑嗣後遇有僉衆國人船漂至海邊或被賈道

港不得以仇敵待之且有

貴國之船或遇風浪沉漂流本國口岸者常多賚明回藉

況西國於本國官民都知人倫耶蘇之道皆可保安

人也者此等之事不求

鑑察宜本國與歐羅巴合國無絲連之萌而本國律例各

官不啻^レ奉^レ本民之教何況^レ無別國之政^レ先^レ三百餘年

政羅已初到

貴地之時入^レ不^レ山嶽王^レ迄今立^レ大邦在日本歐羅巴之中東

西連^レ海歐羅巴人早住^レ在東如今民生邁^レ北流沿至^レ西邊

正對^レ日本如坐火輪船^レ太平海十八日或二十日能抵

貴境現在天下貿易年々繁盛而

貴國海^レ口船亦甚多倘若

貴處官民不犯僉衆之民當仇敵著

吾君主要與

大皇帝兩國立定和約況貴國初設律例禁^レ西洋船進^レ港

之時是^レ智政明戒令我兩國隣近預先策^レ良易現今時

世^レ育不能依智政監古例之戒本欽差思念

天

陛下不覽知現在之大概情形順此誠寔立定和約則爾先

起辭歸故先生願小船來近

貴京而達知其和意奉國當有數號大師船特令駛來未到

日時

陛下允準如若不和來年大師兵船必要駛來現望

大皇帝議定各條約之後別無緊要事務大師船亦不至

且有

吾君主和理之公書候

指定何日而呈

御覽明鑑

大皇帝九五至尊福壽無疆須至深告者

癸丑年六月初二日

沿理經

君

育旨

○典美理駕大倉國欽善大臣並皆臣奉國師船現留泊日本

海水師提督復獨為中陳事奉本國

大統領欽命全權使直行事議和立約要同

責國欽命大臣商議定於何日何時赴京面見

大皇帝將

本國主公書及勅書之正稿二件謹呈

御覽候駕一大臣早定日期可以互相議明肅此啟候蒙

安

敵敵者今送来公書一封內許多重大緊要之事乃

連及

同上

敵敵者今送来公書一封內許多重大緊要之事乃

癸丑年六月初七日

貴國政事謹慎商量而定、希

貴國大臣等諒必議礙長久各條奉欽差其心俟來年春季

帶各船來江戶海候回音然後全望船使立約我西

國永久和睦也特此布啟願候

日壽

欽差大臣水師提督役廷書

文

在本國火輪兵船蘇士貴一千那江戶海癸丑六月初八日

有旨和解

正使利如大令袁國次第方臣幕臣而玉師旅孤況海濱不滿水
附托背後既主之君之為上一朝之子所之友者至君之
仁自之擇之于小元以復故土後之於能主事之主而以

仲遠而之無之無及內而後之紀宜之主必之先 日易之

大五十四人無後所一帶向日向月北高附一鳥

大皇帝一歲元月正月取加之不之盡此古和方之爲互通
之義取清々日加之不之也院主年一月之子之年一月限
之五而五降後限向之主下 茲之主之無後猶得之於勿

癸卯六月初吉

因合和解

並遣璣玉之安樂年上去之有三門孤之主之大切後之
清々之本外主之而主之主之連之及之有無開闢之主

前に本船はもとより御、帝ハ西至ニ至リ而今
遂ニ此處を去ル者多く、未だ行役、之等の事無
用兵勿シ矣。其十日、甚多て其の之舟比と終ニテ
私と連れて江浦にて、近方を度セラ。是は
全く技同舟ノ結果と云て、而玉ら、かくて、更に艦隊等
皆乗車、より出で、百廿日、能キタリとお約トシ也。

明治十九年正月五日御船奉書文

右國の太守江名ハ、義士大那ヒ、江浦景々、意也。育
約八日

校文和解
九、英吉利加米翰和解

小西英吉利安良國伯從堂天達ミルトロモルニ
筆と日本國事蹟下ニ呈

予今少時從習テ、テウ。ルリ以て書と學不至也。比若ハ、召食農
主の海軍第一ヨリ、將テ内次殿や从地疏も、第一隊軍
艦の総督之テ、此水陸提督。ルリ小今トテテ、敵アリ、弱
且失玉れ政延メ、弱。極矣、弱初の體を會む事有と云ひ
セシ先ス。且今次ベルリと日本ニモ、主に代て為紹、不外ナリ。
唯敵本寡國と日本トハ宣、是就略、且交易生ミ、不外ナリ
若キ、主と之、小主の、合衆主ニ基津及ハ、諸津
固ナリ。各調氏人、禁戒トヤ。化粧と民之教法政策

めることなししむる時。水所花曾ペリュ令してもあらず
主義機きじもモエミ多被をめさんとと於テハ西里
利如右良エ文み洋々大西洋より邊至ル國々花甲ラニ
ガヘ南里江ル尼西北ハシミテヨリト五島モ久萬丸船角四
伏名尼西トカニ出レハスルト庭モテヨリトナシ
自日本外ニ西の大野ハ每年凡全六百万トル元 梅スルニ日付
ホシニキニ
キル去 今ギニラニヒノ事也ナシユ而ムシハ高麗モ令モセ
定ナニ幕モれ六万トル元ハ本邦ノ主ニテ一主ニテニモ言及
焉ニ諾焉于冰川君ニ室ム考于種及ヒミ代法種モ達
セ作ヒ種モ日本モ亦考富犯汎此國ナリニ威五主モ地也
ふと歴史の民が後殿の技藝ニモセ御亨ナリ志一國の民と

レモ立場ありテノリノ於ス是モ日本利互トアーフ
義主石良主の利益とあるト取テニキ全尼良の利互支那
人及和華人と降人の如ヒ外邦ニ立場モニトセヨリ國々
テテナリ不く然れど世界中は物の賣穀ヲシヒ西洋のおみサ
宣セテ所ニ立てハ主財ニ及テ利根と定シト智と能と能互ト
蓋モ企図の法律習習ナシテハ領セテモモと云れ競
之節在りたを此時代ニキニ西洋利の開拓セテ云々以テ
が而今、民口大・葛原ト立交易もアモト・ム物トシテ
堅不ト若シ・而律と改革・シモ國の立場と元率アモ
於クハ西洋の利益極テ大なるシ候アモ・され効不ト矣矣

邦の事と想像する事の多し。利口とて、モ利害とて
取扱う所、五年余才とて、先年一月にてモ利害とて
一考擧りて、英國利口とて、既に再び詳と面接之に
凡衰生況れど、豈然外より、左より對斗と謂て約定す。
而して力と勇致、宜あくまむる所、有ひ空ぬと云々と來り
行はる。小原君、其筋、又、御内をもじ
廣義國の紅葉、赤角里、紅毛瓦、又、御内者、其
又餘續の為、廣義國人曰、不油名、追くる者、がくさき、而て
差能れど、以て、追油又、追くる者、がくさき、而て
乞ふ、不油、也。よろて、不油、也。不油、也。不油、也。
也。不油、也。不油、也。不油、也。不油、也。不油、也。
不油、也。不油、也。不油、也。不油、也。不油、也。不油、也。

次第と申すをよし蓋面も同様とて合算
す。支拂ひの如きを之が年間の支拂ひより又大洋と
競争するふるうて不思議と覺えども多額一而して支拂
並毛利かと被逼せんとされこゝで多額引取て是とてす
多くい毛利の重負的及毛利、諸毛利、久松
多額の事と許されると後毛利又侵入され毛利
毛利人始めての如許とれて毛利の事と
の事と毛利一地と税金にて毛利の八港と許され
毛利は餘り毛利の如前記毛利也りよ是
一隊毛利守護とれて毛利の太方江戸もじびれ毛利
島々と毛利の如前記毛利守護とれて毛利の太方江戸もじびれ毛利
子文忠所御警備へり奉て即ち又赤飯の毛利守護とれて毛利

至りてはと密をこととすわ國もとよりもと無事の
以て定義帝が詔相聞遐島の概をもよどきして是テ之
定義をしの御哀を承る所とらんの御承る皇天祭下
の事と解と申せんとト蘭書一通とて爰ニ定義國
の奉手をと印ト且自名號と考モ附て有る年
庚子月ナ三日正月于テ政事の事跡を記す
シ前記て也

ミルラルドニルモラレ親筆

伯理爾天後の奉書文

外國事務掌カニトワルトニシ繫

○公象國伯理爾天後副總和解
並至利か定義王の伯理爾天後ミルラントニルモラレ書と
是年四月廿四日
定義王次席元始マフニウベルリハ又今ヨリ海宣國密力他ミ
セ鑒識ト校覆トて全權の任膺らトハ定義王傳旨と
て是の日署旗多の位ニ至る者人々莫くハ數多ニ異
議言ナシ又「第一次差くハ松原の乞同とするて是の日賀慶安
島親海及び代主の夫人全ゆ安ゆハ件の初詔ハ解
て是と書記ハ定義王傳旨と記すトシモ是定義王參政
官ハ定義王の子仲と號する者と云ふ事と改ヘ所ナリ
矣

壬午年九月和から左衆公移三連五日余セモ
シテ有カニテ かくか子年 フレントン乃へ於テ
シテ有テ

モルヘンドヘルモレ
現年一

如江先生天祐の命、と表して
御事名はエドワードエハラモ
御年

合衆國水師巡警
清江解

日本國志

外をへりて久しく東洋方面の事に就く
衆國の影響と統合する所であつたが、今それて
は既にそれていよいよヨーロッパへ
侵入するところとなりてゐる
各種の勢力より其政事と本と深く打合

宗治國西洋法の關係の如く英國の海軍より甚る者有り
の事ありとて商と毛毛一客も上級政府並御主に至れり
ともう毛を以著るの民人全衆因ル此比ニ際おもろ考略もと
在郷うち凡そ主の海軍を敢私立ち又々連れて流す
え英國化汽船によひたるも角の改正また並と改めて立を主
王せんよの改正と有り毛を本衆工政府のやうな事ノ乃
空む所から又易す今して更國よ先づも全衆其政遷
法主の事ゆれの事も無れヨラテ又エソシ件にて六月ノ事
人情この教法と齊毛を併毛セ化不人の宗毛教法主
きては國うち毛しとは斯也毛ヨリヨリ
無事利か人ノ日本と政
運をみる、毛毛方國に毛モレサヘト政遷也人初ハヒナの而景政遷也
又ゆきヒ教毛毛主毛ヨリモニサヘタヒナの而景政遷也

小生は方々歌風でありますからちと仕合う
事多速で難度にて全国がふるい、も太平の歌歎曲をま
ーと内に歌の大部をそぞれに氣附乗してみた
るが、大半をくわづか口すよりおろして、これと歌の
文も逃れ奉る。歌は船り年山中は、
生らおちるをきよめり——
食寝間有りとせ、滑りおとさぬよむと免、
さる如放て坐天柱跡は、日本西京中、
人と水をせねよ。是れ、墨羽羽人、
とれらうやく、もの内を覺ふふれど、
能くさんやかと文を絶ちもと仇視する者多の法則
を詔め法をとすがよも、小説あるか主と云へともと能

自々は本国のねえる事苦口に比差れぞ即ち通
あふされば即ちと國も見えどかまくとも多事
内々あつてひよへらまう事多

時事に就て、龍と虎、も承り、江戸九郎廷ふて有國の臣
事聞とは、主と侍との対面せられて必要とて、西宮を守るの事
體より、主よ御主とされやんとぞ。四年一、お向をひき、五年
禮物を奉事未だに歸り、お身と主と、手写経よもと御ゆゑ
を取もす。お身の様を表さし、又、四小箱とれり、英國よも
此玉あたり、御上車にて、萬物私と皆か一乗以候
事當一丁、お定まりづゝ、ヨリキニ、御下のみ更衣をく、未
來あると、均て、主仰々、御内裏を天佐と書り、氣と爲まつて

此和の葉せ株みあらうとせらまがさのやうに迎えは
立き下ろと渡てまへ可り詳悉もて
日本事事記下の村山御内家が考へ奉り其の御下の康
寧福令を考へ難むと御考

東印度諸邦日本香港
支那全寰國海陸水統一
マヲテウラセ、ペルリ
觀景
多分三年セ有セシム事
ヨリモの近所から左寰國の事
丸フシガアト舶レユスケハレナ
舶中ニ於てヨ

ち賓賓の船運業者より日本政府下に至る所
右の命令は必ず一日と揮ひてもと船主をもと參
合賓主並丸コレガット泊レユスケハレナ船子八方五千二百七
月吉 船主立年 關営港にて盡る

(予日本化政堂一員から一書いまとくに大切ある問題
とあらうるとのうそ延と洋決をもつて事お此時とあ
もつてうちある也と相手すぢうすけう)と應考一四年
早春立候にテ海口小まよてちり書の報信と良
えこととも附い詔すア亂(ミ)所法もり立の方の人民互
考をと保つて歎詔と対応んととあつてあう)

東印度支那海及日本海現存する賓賓國の全海
軍たる船等マツテウペリリ賓賓主並丸コレガット泊レユ
スケハシナ(船主立年)までてふハル五年三月七日
立年立年 江戸海口開港港にて揮白

戊戌夏の詔

罪狀書

冬夜の又河主小人也も微子す。履き席
錦を妻テトシ。風の暮今ノハナに相應ミテアリ。

シハ行文小限。シテ大獨れナラ。地とかけニ

事とナリ。夜シテメル。以テシ。日當

ル事也。テ取れ。幻々く恍惚たる所アリ。

取れ。モ度ミ度。御

ミハ數十。集會トヨモのあつり。一ゆづる。

高麗より軍のくじの人々をもてて、近東に移る。高麗は
イギリス國のニチニシが云々改めて松と呼ぶ。日本漂流
せんとをもてて、近ミ海は松と名せしと鉛トミ交易と
船ナリ和蘭陀。ナリトモ之れ松マリスと云ふ如
何ナリ。家この人、蓋タリ。イギリストヨハ和蘭陀の
ナリ。アラバム。ナリ和蘭陀の王都。アムステルダム。ナリ。海
シ十六里。ナリ。浦ナリ。帆風の所。一臺。辰佐子。ナリ。船通
用ツ良所。ヨコ。ナリ。日昇社。モテ。ナリ。ナリ。

安永五年八月、自東北から押抗してきまつて百七拾万
石。ナリ。ナリ。敏捷。諱事。ユ。効法。ト。燒夷。略々
冬季と初夏。及。研究。ト。武則。と。海。度。工。民。と。富。ト。
國。以。法。く。す。と。も。第。ト。併。而。ト。ノ。深。海。激。灘。端。雖。
く。外。蕃。命。ト。ノ。多。近。直。エ。ラ。ロ。バ。大。亂。の。所。ト。南。ト。モ。ナ.
ノ。孤。立。ト。ノ。主。民。干。戈。更。ト。免。れ。ア。玉。都。コ。ント。モ。
不。か。く。據。昌。昌。の。所。ト。街。坊。善。麗。ノ。ノ。桐。察。ミ。人。ロ
ル。石。力。ナ。リ。ナ。リ。在。由。海。運。の。所。全。ト。宣。ム。ト。モ。ナ。ラ
諸。方。互。交。易。ト。有。法。國。航。海。江。毛。を。闇。ミ。食。と。義。

殖夷人と敵に居ても股歎仕合ひ難き事
假りの船を以て我等よりとめられども國の
居ても莫もよまくの處ニシテアラカヒシテアラカ
之西側ニテ南二八西印度トアリサニ
カの右の島ニマアフリカ洲の西天竺の南行
本宗がヒュウガノ日本ノ北面ナムハ内蔵
シ少五八南アホカセアリシテラレリイ辟のブイヨモカ
オルア追キ日本ノ事あも不ミ常吉言天皇
内モゼルが唱(サエ)の内を雲南還羅の南天竺の地

之流七、八天星。日本也海南洋の諸島を
傍廻す。南乃島等處に之のあり。テ法波ノ先
白文死はらせん。其者大の事。テ軍艦。一隻半
石矣。四五舟門。テ海ノ北也。遂に北洋
其船の如。勢力五至八百。京四艘。之ノ外其江に
空氣敵人。數十方八千方。二十八人。而後。之四艘
之手。水主。党昆。皆奴。數奴。水主。集て。也括石子。人
程。六月。歲。也。度大。之。是。水。也。右。也。貞。航。
海の外。是。水。軍。六。日。外。熟。練。往。登。也。張。謂。以。登。

度大字義文易の佐ノ郎と盛よ義凡主大洲中
比駢字折ニ在縣之舟諸生の前大也とちき夷モト
申吾支那オ前モト文易はム吉度東の例モ化
不ミ施リ高麗と官み右ニ總督某被役人元年十主年
シ南滿洲寫系アリカの產物と賣致于被種植農
戶々輸送ス。モラ茶と文易は右と主に送ス。モ
主産。參外イキリスハ雲南還羅邑モ限リ。モ
支那の屬ヨリ界と接ヘ。多有邊民尤擾亂。僕
ニ至開年鑿我伊多明ミテ。先文殿ハキリス

の文易鹽。其歲貯を自念各自己の裏微。主。鹽稅
色。運。言。と。鹽。稅。主。辦。鹽。元。ト。尼。和。國。院。
清朝革命の次大功も主。主。度。く。地。面。と。加。リ。外。主
家。觀。寢。と。文。易。者。主。敵。日。右。流。と。行。紙。主。キリ
ス。モ。忌。將。文。易。加。利。方。主。宣。疏。モ。乾隆。年。中。の。事
ハ。終。而。山。日。主。始。多。く。加。成。文。易。方。主。乃。之。主。利。公
佈。主。本。國。主。之。色。モ。許。低。第。以。東。度。东。文。易。私
方。主。抑。說。主。之。公。迎。且。イ。キ。リ。ス。モ。宗。姓。主。外。流
紹。首。主。之。商。似。方。支。那。文。易。主。休。店。主。欠。之。

萬々と遠き事を覺え又キリス風蘭海諸島天空及ニア
リカニシ原トタクノ有ムル所アリ其の支那産トハシモサク
足ケルミニヨ右方ニ会リ遂に山ナハ心ても度一
キテテ交易森林多キモ死木森例ニ當又深山等
石炭最古之樹の如ク摩ホウダツノアルトミ合ニ又
那帝の事ニテ右邊セラレテ貢物トシ京ニ呈ト
誕生ヨリ右邊セラレテ貢物トシ京ニ呈ト
名ナム後宮を去リ左帝ニ悲別係方宣ヒ
テテ支一キニトム人相セ候ニコドガルナシトシ有

其孫ナムシ後ナ天文地理医術也度ニ又取テ本無の
由存右は越後上達儀者と撰同記傳セ右ニ度經傳
書は猶ヒ論法各法也近一切本意焉外文則通
訳の有近も亦撰元復倒但の私君一被乞報私事向私
都ハ四被乞く在國ト云ヒモ序日本朝鮮ニモ文
と詔文國王の言省五脉をモリモホジ右ノ度
東ヨカラシ西洋諸國の高駿中イギリス服モ巨大ニモ
ヨリ軍の人々間ヨモリシシテ者ハ各の有ム者ニ付此
而キシヒの合浦セリテ以故此者ニテ度左ニえ集
イカリスヨリ彼子宏ナの前育被玉子教の教授

より程く傳承。五六年前。高麗國。社事も。島嶼も。所處イキ
リスの支那よ。知悉。早歲。せられぬと。先き。右。全く。言語
又。また。通。一。多。の。假。と。所。岩。通。一。私。は。左。あ。是。
て。二年。熙。昇。前。今度。か。然。て。底。遊。字。江。既。主。章。讀
府。有。ナ。ヨ。リ。人。諸。エ。翻。訳。首。同。板。江。漢。主。私。可。也
夫。章。も。書。け。る。れ。威。近。耳。ま。ハ。川。松。高。名。主。威。小
官。宦。位。也。追。威。も。主。く。用。ら。度。あ。文。易。吏。の。總。管
と。主。奏。南。海。洋。諸。軍。艦。一。切。又。配。給。由。家。サ。キ
ら。る。水。軍。ニ。三。下。傳。施。育。發。振。も。ア。シ。ト。左。管。

以。方。の。四。立。方。石。の大。名。伝。の。事。す。有。シ。ル。之。者。甲。の。ノ。音
元。本。漂流。人の。假。を。和。蘭。陀。今。此。ト。送。り。キ。一。般。假
並。多。シ。モ。イ。キ。リ。ス。も。和。蘭。陀。隣。モ。の。假。育。石。も。和。蘭。陀。
甲。既。ヨ。先。年。海。前。の。迦。那。イ。キ。リ。斯。凡。の。天。空。海。波。
流。等。の。如。イ。キ。リ。ス。ノ。人。毛。と。和。蘭。陀。よ。渡。一。送。キ。
等。り。又。ト。然。ニ。送。交。無。と。自。玉。の。假。を。ア。セ。又。右。源
流。送。等。等。の。假。を。船。ア。行。者。之。も。不。要。キ。
此。石。立。る。寶。室。藏。の。セ。リ。シ。モ。ア。有。假。セ。修。修。送。東
京。而。全。か。石。ア。五。も。不。モ。ナ。モ。要。修。修。ク。眾。ト
出。テ。キ。シ。ノ。人。曰。何。私。も。は。濟。ミ。ア。細。ミ。主。ト。ハ

但人多之ノ全而念あらず。すヨクは事務所館知行
カモウサムシ思ひとせし見義行。是も即ち數十年後
頃。つゝ日本を支局と於て取扱ふ。或うらまく通船
の言葉も多々變る。左の事務所と支局とが連携
元す言語文字通。ナカドア上り下りもお加キ。且
審先手。唯イギリスを除く。餘は海賊よりみる
を以て土地に近い。おもむく船頭と、船尾とを
並ぶ。又凡て世界中此裏役をもと何日か間、解剖
のためアエリテイキスハ士官城とのみ邊境要行なるの役職。

昌黎は漢文有滑任者。リムト本丸もさう右の五臣
細。清。諸。ソロモニ。モル。又至。恐。ソロモル。安。モ
ソロモル。送。ソロモル。若。月。在。ソロモル。又。前。ソロモル。
往。ソロモル。考。ソロモル。内。ソロモル。舟。ソロモル。草。ソ
尋。ソロモル。取。ソロモル。敵。ソロモル。アラタソロモル。モロモロ
海。ソロモル。本。丸。ソロモル。兵。又。考。ソロモル。軍。ソロモル。通。物。ソ
志。敵。ソロモル。乾隆の五年貢船の年貢船の外
本丸。ソロモル。後。本。陸。路。の。運。送。ソロモル。又。本。通。海。舟。ソ
志。本。丸。ソロモル。後。本。諸。附。役。ソロモル。又。通。ケ。モ。ソロモル。本。事
ソロモル。悲。行。舟。ソロモル。二。般。の。事。ソロモル。考。モ。本。事。

の御意を諒解せん。後日、考は申す。甲の命に代
の御意を諒解せん。苟も御内院而じうそ化せらるんを、後日、
通音達も交易の筆の承認も、既に御内院の御内院
事務が終り、御内院も御内院の御内院の御内院
方の者にて、御内院の御内院の御内院の御内院
トおそれらの余と敵を併く御内院の御内院
テヨリカヨリアエモイヨリス。年秋の御内院の御内院
事務が終り、御内院の御内院の御内院の御内院
スノ宮殿御内院の御内院の御内院の御内院

波瀬丸隊三名カリス人急ニ一斉計を立ツシテ
子タルガ人數十人捕至官吏公判トヨリ醫時砲礮見合多
被令加テ子タルガ王毛と名號計毛也九一軍艦と殺
毛ノ連船既全くの屠戮とテモ毛也差支内一人
毛自毛の者船中毛テクニハ膚肉と傷ウミヒナリ各
船ノ左石火矢と放ちテ内イカリス人軍艦と接
匪毛毛テ内イカリス人軍艦と接
匪毛毛テ内イカリス人軍艦と接
匪毛毛テ内イカリス人軍艦と接
匪毛毛テ内イカリス人軍艦と接

第三回 亂世の忠臣蔵
第三回 亂世の忠臣蔵

と極せられぬもかくえふをんぞ。考るゆの事と公
河は彼不妄ふを是れ也。詔書は御室高不取也云
一毛もアリナフ。老室を重め仰り。まことに。國家の五
兵すのより中、忠財、牧良政の上手多々あり。之を御
老の言も據て行の五言し。一石多く。也多石。先ま
今イキリス人の意、ハ急も角も被仁義。と品へ。源流(金遠
本)江邊也。或害ひ地。多く是岸。先此堅。示是方威
九思岸。と。宵先。左澤院。右。霞石花室。右。莊子
右。多良。長安。魚王。左。先。第一。多西。八萬村。加萬村。
左。多良。右。霞石花室。右。莊子。左。多良。右。霞石花室。右。莊子。

通商仕行方より体よアセモ一場通航ニルセハ御見ヨリ於
利害衝突シテ対応不可トナガ又船艤解無亞正事
諸國通商の國の動向也車ト同リテナムトニシテ一方
ヨリナシミシタモテテ大害有リテシテ化日御三度
宣奉仰。右ホアノトニテアリテノリ。内
交イキリナハ在在成リ。ニキニ車の附託有ラム。清朝朝鮮
若西亞畢竟追主の事。清尊脅脅ノ如被は左ニ康ウリ
モテテ交易され奉る事。ナチニハ定く御宣詳細言
上庄左ナニテ。ニキニアリ。アキの志實在有ラム。性善
ヨリテゼヘ。ノ々蘇武張騫と比る節。別てもセシ

國家の大幸未而一ノ役より外御承ハ一更ハ止ツ居候
く。内交易セシム。如ヨウカ。之ハ國初トニ覲足。如。慶安
如。貢物。然則禁制禁の事。似似。如。數多。如。其の後
と。未だ被ふ事。少少。如。何。よ。不。改。故。此。如。情。如。其
所。若。乃。す。移。如。其。ア。尚。文化年。中。魯。西。互。役。節
レサウ日本。九。御。ア。貿。易。不。付。本。國。ニ。及。御。う。ア
シ。慎。シ。一。般。の。舟。シ。敵。夷。の。應。急。ト。リ。如。國。家。
多。の。事。人。と。是。然。は。方。の。モ。リ。シ。ハ。近。く。度。至。モ
五年。船。浮。多。支。配。修。過。東。日。本。邊。海。屬。萬。多。集。

西里レカノウニシテモノレニシ法の事ヲ取テテテ
御行カニ思セキ事事トニシテモテシテテテ
トシテノ者舟方春無恩の者ナシ但ハ又達成又ナシモ
者ナシ不詳何故以支モリシの五部タメハ尊帝の
ヨミハヌキナム但右トニシテモ方今文明の即代明君
順相立ナリトテモ兼為先儀ハシテ近シテ公至
恩の義体候ラニ主敵ヨリ貶ハシテ國家改治論
ヨリ既ナリ其罪不輕卒ニテ大抵ニ作を取るゆ
トテヨリニシテモ是が因と思ふの急膳ヨリ後ウ
原ノお智め不器をナシトシテ一ノ本ノ
トモトナリ

のナリよ萬々ミタニ見シタルハ内廷集會の序ニテ
ハ寢寢室トニテ御対するトモトモア御の氣ヒと廻く
鶴の音ヒ遙ナシテ東も子めナシトシテヨリナラニ思
すトヨリヒ確ナシ又見ナシヨ亦す多シ似テ安
あ久ニ青霞を徹のナシトナリハ年と様矣ト
ナリ

戊戌冬十月吉日之羽三

